

---

# Arraignments 一嘆きの鴉と謳う魔女一

成瀬律

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Arraignm e n t 嘆きの鴉と謳う魔女

### 【Nコード】

N1031X

### 【作者名】

成瀬律

### 【あらすじ】

東京国に住む、音無沙刀オトナシサトウと、風見盧杞カザミロキは、幼い時に大切な家族を魔能力者に殺され、魔能力者という名の化物を憎んでいた。魔能力者を憎みながらも、何も行動をすることのできなかった8年間。しかし、そんな彼らの前に、金髪のハーフ転校生、熊沢ムギが現れることによって、新たな人生と、始まりと終焉を迎えるコトになる。

Arraignm e n t 【罪状認否】「いったい誰が悪かったのか？何がいけなかったのか？貴方は罪を認める？」（a p p l e a o

f g u i l t y (それとも無実を主張する?) (n o t g u i l  
t y) さあ、真実を、偽りの年月に終焉を共に迎えよう・・・

個人的に経営しております、咎檻の心というサイトで先行公開を行  
っております。 <http://m-pe.tv/u/?toga>

o r i n o k k o r o

## 魔序・マジヨ

### 仮想20世紀

科学が急激に進歩したこの星で、未だ謎を解明することの出来ない種族がいた。

何百年も前に出現したという、【魔能力者】その者たちは人の姿をしていながら、自然現象を自在に操るなど、現時点の科学では説明することの出来ない能力を使う、人と同じカタチをしていながら、人と違う理で生きる者たちだ。

ある者は彼らを崇拜し、ある者は彼らを化け物だといった。

彼らは、自らを【魔人】と名乗り、新たな種族だと言う。

しかし、半数以上の人類は、彼らを見とめようとはしなかった。

何百年も昔はじめて、人間が魔人を滅ぼそうとした、1年の戦争、通称悪魔聖戦。

それは、圧倒的な数における、人間の勝利。になるはずだったが、現実は大大きく異なり、彼らは、戦争に勝利し西洋の地に国を建国してしまう。

2011年現在、魔人の国【アルタシア王国】は、現在も存在し続け、未だ世界の人々から、恐怖と崇拜を受けていた。

この世には、化け物だらけだ。

人の皮をかぶって、俺たち人間がもがき苦しむのを待ってるんだ。

許すものか。許してたまるものか。

アイツが、俺の、俺の全てを奪ったんだから、俺は復讐してやる。

だから、アイツの仲間の

化け物なんて、皆死んでしまえばいいんだ。

俺は忘れない……。

あの夏の日を……

赤色の炎と、赤色の血の、鮮やかで、残酷なあの日を……

一生忘れてやるもんか、

”アイツ”が”俺”の全てを奪ったんだから。

思い出せ

思い出せ

そう

心の中で誰かが悲鳴を上げる

だから、

・・・俺は・・・。

そして、俺はまた朝を迎える。

## 始初・ハジマリトハジマリ

Arraignement【罪状認否シリーズ】

第一章 - 嘆きの鴉と嗤う魔女 -

東京国

世界において、この国の名を知らぬ者はいないだろう。

何故なら、世界の中で最も安全で、貧しい者のいない国だと言われ、また、科学の進歩も凄まじい国だからだ。資源が乏しく、大陸の従国という点を除けば、世界の人々は誰もがこの国に住みたがるだろう。

AM 8:30

朝ということにもかかわらず、廊下からは女子高生の笑い声や、教室からは、男子生徒の叫び声や、勉強の話が聞こえてくる。

公立東京都志水高等学校

そこは、東京国になら、どこにでもある普通の高校だ。

だけど、そこは、外国では考えられないほど、充実した学生生活だということはこの国にいるものは、それを知らない。

文字や言葉ではそれを知っているのに、実際に恵まれているのだと、本当に知っている者などいないのだ。

「・・・暇だ」

そんな世界一平和だと言われる国の高校で、オトナシサトウ高校三年生、音無沙刀は憂鬱を感じていた。

ワックスで、整えた、少し暗めのこげ茶の髪と、東洋人にしては、明るめの瞳をしたサトウは、身長も高くルックスもいい。そのため彼は女子から壮大な人気を得ており、普通、そのような男は同性からは嫌われるのがセオリーなのだが、しかしサトウの、カリスマ性を持つていながらも、余り目立とうとしない、そんな意外にも控えめな性格に、男子からも好感を持たれており、サトウは要するにクラスラスの男女から共に人気があった。

そんな、普通の高校生より全てが、充実し恵まれた様に感じられる彼からは、溜息ばかりが漏れ出ていた。



「沙刀つたら、また溜息吐いてんの？」

突然、爽やかなハスキーボイスが声をかけてきた。

沙刀は、普段は控えめな性格で、人付き合いも良い方なのだが、やはり見た目が不良的雰囲気醸し出しているせいか、沙刀が機嫌が悪そうなときに声をかけてくる者などクラスの中には殆どいない。

窓側の一番後ろという自分の特等の席で、思い切り、伏せたまま話かけてくるなという雰囲気、溜息を吐いていた沙刀に声をかける人物。

それは、沙刀の中ではたった一人しか思い浮かばなかった。

「なんか文句あるか、盧杞<sup>ロキ</sup>」

伏せた顔を起き上がらせることなく返事をする沙刀。

「・・・あれ？なんでわかったの？」

その言葉に、今度こそ沙刀は、身体を起こし声の主を睨みつける。

「当たり前だろうが。機嫌の悪い俺に話しかけてくるなんてクラスじゃ限られてるし、第一お前と何年の付き合いだと思ってんだ」

「ああ、そつか。8年間の付き合いの幼馴染が声かけてんのに気づかないのは流石にないか。」

あははつと、洗剤のCMが似合うほどの爽やかな笑顔で、沙刀に笑いかける彼、カゼミロキ風見盧杞は、真正銘、沙刀の幼馴染であった。

盧杞の、染めた胡桃色の髪の毛は、後ろ姿をみれば、一見チャライ学校中退前の生徒に見える。しかし、人懐っこい性格もあってか、正面をみれば、その顔は、爽やかなスポーツマンというばかりのイケメンで、脱色をした不良という雰囲気は一ミリも感じられない。

「で？我等がクラスの人気者沙刀君は、何が気に入らないのかな？」

「・・・人気者って・・・お前に言われたくないんだけど」

沙刀も、一応クラスの中心的人物ではあるが、盧杞ほどではない。盧杞こそがクラスの中心にいつも存在している。

沙刀は盧杞の、嫌味ではなく素の言葉に、はっと溜息を吐いた

「別にただ、進路どうしようかと悩んでただけだ」

「進路？」

真剣な表情をし盧杞に問いかける沙刀に、先ほどまではふざけた表示をしていた盧杞も、気持ちを切り替えるかの様に瞬きをした後、真剣な表情になった。

「いいや。俺もまだ悩んでる。でも、そうだよね・・・警察とかに就職した方が、一刻も早くあの時の【犯人】が見つかるかもしれ

ない・・・だけど」

盧杞は、イキナリ言葉を止め、そして窓の向こうを見つめた。

「・・・だけど、その仲間の【バケモノ共】を一人でも多く殺す為には、キャリアがいる。そのためには進学が必要で、俺たちはまた、何も行動することのできない無力な日々が続く」

「・・・無力」

「・・・そう無力。俺たちは、家族を、大事な全てを、【魔能力者】という名のバケモノ共に奪われた。・・・なのに、あんなに復讐を誓ったのに、俺たちは未だに何もできていない。・・・それも、8年間、8年間ずっとだ。」

「・・・ああ、そうだな」

8年前の夏、俺たちはかけがえのない、大切な家族を失った。

・・・8年前

今でも思いたす。

いつもより豪華な料理に、蝋燭のついたバースデーケーキ。

あの日は俺の、音無沙刀の10歳の誕生日だった。

近所に住んでいる幼馴染の、盧杞と、盧杞とあまり似ていない双子の妹、百合香を、自宅に招いて、開いたバースデーパーティー。何もかもが幸せで、最高の時間だった。

だけど、その幸せな時間は突然終わりを迎える。

料理も食べ終わり、ケーキに蝋燭をつけて、沙刀が火を消そうとした瞬間

突然、蝋燭の火じゃない、真っ赤な炎が家の全てを覆った。

そして、炎が広がると同時にリビングに現れた、気味の悪い男。あの不気味な笑い声は今でも覚えているのに、何故か、どんなに顔を思い出そうとしても、未だ盧杞も俺も顔を思い出すことはできない。

そして、何時の間にか気を失っていた俺たちが、気がついた時には、周りには何も無くなっていた。

俺と盧杞以外の全てが真っ黒な灰になっていた。

家も、百合香も、自分の父と母も、焼けた、炭の様になった木材すらも見つからなくて、住宅街の自分の家だった空間だけが、最初から何も存在していなかった様に、ぽっかりと黒ずみの空き地ができた。

警察は、その通常ではあり得ない火災の家の焼け跡の状態から、あの男は、全てを燃やした犯人は、【魔能力者】だろうといった。

### 【魔能力者】

幼い俺たちでさえ【魔能力者】という言葉は知っていた。

人の形をしたバケモノ達、それが魔能力者だ。

時には、魔女や魔人などと様々な名称で呼ばれることもある彼らは、人間と同じ人の形をしていながら、炎や地震といった自然を自在に操る。

ある者は竜巻を起こせ、ある者は大地を揺らすことができる。

人間とは違う摂理で生きる者たち。

彼らは、西洋に存在する、【アルタシア王国】という名の魔能力者の国以外で、世界中の殆どで人間としては認められず、恐れられていた。

ここ東京国なんかは、特に、魔能力者に批判的で、東京国で魔能力者を見つければ、速攻で国外追放か、犯罪者として始末される。

だから、東京国で魔能力者が発見されること、ましてや魔能力者によって、殺人が行われるなど、早々あるものではない。

それなのに、この国に、それも殺人鬼として魔能力者は俺たちの前に現れた。

あの日、盧杞は最愛の妹を失い、俺は両親……いや、家族と言える存在全てを失った。

断片的な不完全な記憶。

だけど、この完璧じゃない断片的な記憶は、俺たちの復讐心を増幅させるには十分で

俺たちは、あの日確かに誓いを立てた。

「犯人を必ず見つけ、復讐してやろう。そしていつか、世界中の魔能力者を……、バケモノ共を皆殺しにして、俺たちが平和な世界を作るんだ」

ちっばけで、簡単な口約束。

だけど、俺たちは本気だった。

……魔能力者を皆殺しにする。

その為に、まずは偉くなって、そして強くなって、バケモノ共の国である【アルタシア王国】を滅ぼしてやろう。

・・・そんな風に俺たちは、魔能力者を恨み続け、既に8年もの時間が過ぎていた。

「・・・ねえ、沙刀」

「ービクッ

あの日のコトを思い出してた沙刀は、突然、盧杞の言葉により現実世界に呼び戻される。

「な、なんだよイキナリ」

「・・・。」

沙刀が盧杞を見なおせば、彼は、既に窓の外ではなく、再び真っ直ぐと沙刀を見つめていた。



、……まるで沙刀を、いや、沙刀と同じもう一人の復讐者、自身自身を、まるで鏡合わせの自分を自傷するかの様に見つめ

そして

「……。本当はわかってるんだ。俺も……お前も、進学以外に道はないってこと。だって高卒の公務員なんかじゃ、国は滅ぼせないんだから」

そして、馬鹿みたいだと、言いながら、嗤った。

「ああ、……そうだな」

沙刀も、盧杞を見て嗤う。

無力な日々がまだ終わらない……。  
だけど、俺たちは止まらない。

全てのバケモノ共を皆殺しにしてやるまで

目の前のちっばけな目標よりも、その先の祈願を叶える為に

お互いが本当に馬鹿みたいだと言いながら声を出さず笑った。

そして、沙刀は、突然、盧杞から視線を外し鞆の中から、一本のボールペンと、紙を取り出した。

そして、しっかりと大きな文字で、進路希望書と書かれた、その用紙に沙刀は、今度こそ迷いなく、【進学】と書かれている方に、しっかりと大きな円で、丸をした。

彼らは、は8年間、何もできなかった。

大事な全てを奪われたのに  
今もこれ程憎みを抱えているのに。

そして彼らの無力さは  
これからも・・・少なくとも、大学を卒業するまで・・・また、続く。

まだ続く。

・・・そう思っていた。

沙刀も、盧杞も。

何故なら彼らはこの時、知らなかったのだ。

本当は、真実が、目の前に迫っているということを、無力だった日々が、偽りを抱えていた日々が、終焉を迎えようとしていた事を。

彼はは、知らなかった。

AM 9 : 45

残り15分・・・。

それが、彼らの、今まで無力な日々が終わるまでの時間だ。

そして、新たな選択が始まる時間であった。



## 転点・テンテン

AM 8 : 56

ホームルームの予鈴のチャイムがなり終わる。調度沙刀の席からは校門がよく見える席で、校門では、予鈴に間に合わず生徒指導室につれていかれていた。

「うわ、めっちゃ連れてかれてんだけど」

「ほんとだー、俺らのクラスの奴いんの？」

盧杞の言葉に、沙刀はクラスを見渡す。しかし、殆どのクラスの奴が、予鈴が鳴ったにも関わらず自分達みたいに席に座っていなかった。正確にはわからなかった。

ただ、逆にいつも予鈴が鳴ると席に必ず座っているクラス委員の二人がいない。

沙刀は顔にハテナマークを浮かべながら

「佐久間と椎葉がいねーぞ？」

と、盧杞に問いかける。

すると、盧杞もあれ？という顔をした。

「本当だ。あの二人が席に着いてないなんて・・・欠席？いや、も

「しかし意外にサボりとか？」

「アホか・・・、椎葉の方はともかく佐久間が、学校サボるとかあり得ねえだろ。あの佐久間だぞ？」

佐久間<sup>サクマススキ</sup>煤記と椎葉<sup>シイバマトラ</sup>魔虎はクラス委員という間柄からか、よく行動を共にしていることが多い。

しかし彼らは、親友というほど仲が良いわけではなく、協調性の無い椎葉魔虎を、やけに紳士的な正確な佐久間煤記が、周りと馴染ませようと共にいる、といった方がシツクリくるのかもしれない。

要するに、佐久間煤記の考えはわからないが、結局、椎葉魔虎には、佐久間煤記と仲良くしておきたいという、友情はまったく無いということだ。

その二人が居ないということは・・・。沙刀が思考を張り巡らせる。

・・・と、その時

「何が、あの佐久間ですか？沙刀君？」

噂をすればなんとやら、とは正にこのことで、ニッコリと紳士的だがドス黒い笑顔を向けて、後ろのドアから入ってきたのは、噂の張本人佐久間だった。

「ゲッ」

沙刀と盧杞は互いの顔を見合わせる。

そんな二人に追い討ちをかけるように佐久間は言葉を続けた。

「二人ともおはようございます。朝から僕が居ないのを言いことに、言いたい放題ですね」

ニッコリ

「……………」

生まれつきだという、明るめの色をした茶髪と、茶色い瞳だけでは軟派なイメージを匂わせるが、十代というには、余りにも丁寧すぎる彼の言葉使いと上手く溶け込み、日頃から彼は独特の色気を醸し出している。

しかし、何故か時々彼の紳士的な笑顔には、ドス黒いオーラがにじみ出ていた。

これは、決して気のせいではない。

そう、沙刀と盧杞、……いや、クラスの全員は確信していた。

何故なら、そんな時の彼は、佐久間煤記は、

【瞳】がいつも本気で笑ってないからだ。

「はあ、まあイイですけどね、別に」

これみよがしに、大きなため息を吐く佐久間。

そんな佐久間に二人はヤバイと焦る。そしてそういう時にまず一番大切なのは、どちらが先にこの、ブラツクな微笑みから開放されるかということだ。

そして、意外にも先に微笑みから開放されたのは、・・・いや、先に親友と呼べる仲間を裏切ったのは盧杞の方だった。

「ごめん佐久間くっ！沙刀だって悪気があったワケじゃないんだ！許してあげて！」

そんな盧杞に沙刀はハアツ?!と顔を睨みつける。  
しかし、盧杞は見ようもしない。



「オイ?!俺だけか?!俺だけが悪いのかよ?!」

「そうだよ?だって俺は、佐久間と椎葉は休みなのかな?っついでただけだし」

「ふざけんな!?元はといえば、お前が、二人ともサボりかなあ」とか言ってたんだろ」

「ちよつと?!それはいわなッ・・・いや、それは沙刀が言ったんだよ!」

「はあー???ちよッオイ!あー!もういい!!お前は今ここで死ぬ!」

沙刀は丁度自分の机においてあった未開封のペットボトルを

ガンッ

盧杞の顔面めがけて投げる。

しかし、そのペットボトルは狙いが外れ、盧杞の右肩に命中した。

「ッいった!!ちよッ何すんだよ」

「お前はがダチを裏切るからだ!」

「だからって普通ペットボトルは投げないでしょ?!」

盧杞も投げられたペットボトルを握りしめ、いよいよ本気な喧嘩に

なろうとしていた時、

「・・・ハイハイ！このままだと、冗談がマジの喧嘩になりそうだから、もう止めてください。さっきのは冗談で言ったことです。別に二人が本気で僕の悪口いったなんて思っ  
てませんよ」

と佐久間が苦笑いで仲裁に入ったのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1031x/>

---

Arraignment—嘆きの鴉と謳う魔女—

2011年10月9日15時51分発行